

# 研究成果の評価

評価委員

檜澤 一夫 井上 満

進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究班（山田班）の昭和52年度研究業績が各研究部会長によってまとめられ、班長報告として総括されるに至った。

部会長報告を通読して、本年度においても多数のユニークな成果を見出すことができる。以下それらのいくつかにふれながら評価を加える。

まず、機能障害研究グループは、脊柱変形、関節拘縮、歩行、咬合、発語障害の発現の機序、歩様式、時期などを検討している。咬合や発語の異常などは患者のベッドサイドにあって常に注意深く観察していなければ見落されがちである。これらの分析結果はDuchenne型患者における顔筋の萎縮脱力の発現、進行の状況を解明し、それに対処する上に不可欠の資料を提供した。

心理障害・生活指導研究グループからは、先の「筋ジストロフィー者の心理特性とそのcare」につづいて、「筋ジストロフィー者の生活指導事例集」が提出された。本書は患者の悩みを理解し、生活指導を行う指針として大変貴重な集大成である。またこの事例集を読んで、筋ジストロフィー症という難病に、医師のみならず多数のパラメディカル職員がいかに多くの労苦を注いでいるかを知り深い感銘を受けた。

看護・栄養研究部門では、各施設間の統一をはかり、より合理的な方法を求めて地道な努力が続けられた。昨年の看護基準に続いて、栄養に関する共同研究部会で食餌基準の作成が準備されている。

療養機器開発研究グループは、患者の日常生活の改善、介護労作の軽減、病勢進行阻止に多大の貢献をなしてきたが、本年は水洗トイレ付きベッドをはじめとして各種の効果的な装具を開発した。

病態生理学的研究としては、筋ジストロフィー患者の心肺機能、血液循環動態の分析が行われ、剖検所見として新たに心刺激伝導系の病変も見出された。これらは孔因の全体をなす異常であって、患者の一層の延命を図るために欠くことのできない研究分野である。

生化学的および基礎的研究の分野では、筋ジストロフィー・マウス筋芽細胞の細胞生物学、酵素化学研究、患者の内分泌異常の探索などがなされた。これらはまだ開始されたばかりであるが今後の成果が期待される。

特定研究部会では、Duchenne型類似の女性患者の詳細な家系調査を行っている。これは筋ジストロフィー症の遺伝臨床的分類の基礎となる重要な調査であり、今後さらにデータを積み重ねて貴重な資料としてまとめられることを期待する。

以上、昭和52年度における研究成果は筋ジストロフィー症の病態の解明、治療に寄与するところが大きく高く評価したい。

本研究班は発足以来十数年を経て累年の業績は甚だ大きく、特に筋疾患患者のリハビリテーション、治療の面での貢献が著しい。班員の多くが臨床医学者であることもあって、患者が最も苦痛とする諸種の機能異常や心理的葛藤に対処して続けられた努力は、地味ではあるがまことに適切であった。

本研究班が本年度をもって終止符を打たなければならないのはまことに残念である。今日までこの研究班の組織も逐次改組されて能率的な構成になってきたところであり、各部門とも研究成果の向上と発展を期待されていた。各班員のもとでは今まで通りの研究が継続される筈であるが、それに対して何らかの形で助成が続けられるならば、各施設における研究意欲は格段に高められ、研究の進展にも一層の拍車がかげられることと思う。

↓  
**検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用  
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります  
↓

進行性筋ジストロフィー症の成因と治療に関する臨床的研究班(山田班)の昭和52年度研究業績が各研究部会長によってまとめられ、班長報告として総括されるに至った。

部会長報告を通読して、本年度においても多数のユニークな成果を見出すことができる。以下それらのいくつかにふれながら評価を加える。

まず、機能障害研究グループは、脊柱変形、関節拘縮、歩行、咬合、発語障害の発現の機序、様式、時期などを検討している。咬合や発語の異常などは患者のベッドサイドにあって常に注意深く観察していなければ見落されがちである。これらの分析結果は Duchenne 型患者における顔筋の萎縮脱力の発現、進行の状況を解明し、それに対処する上に不可欠の資料を提供した。